

浄土

十月號

目次

表紙・巻頭カット……中島 保

團結を鞏くせん……(巻頭言)

内に隠れたるもの……

……吉田絃二郎……(一)

義村の來迎會……

……佐藤賢順……(四)

醫學と宗教……

……式場隆三郎……(六)

南の朝顔……

……神山 潤……(八)

言ふなのち地藏様(童話)……

……安倍季雄……(三)

信仰相談……(一〇)

腹のつくり方……(六)

歌壇……岩野喜久代選……(一七)

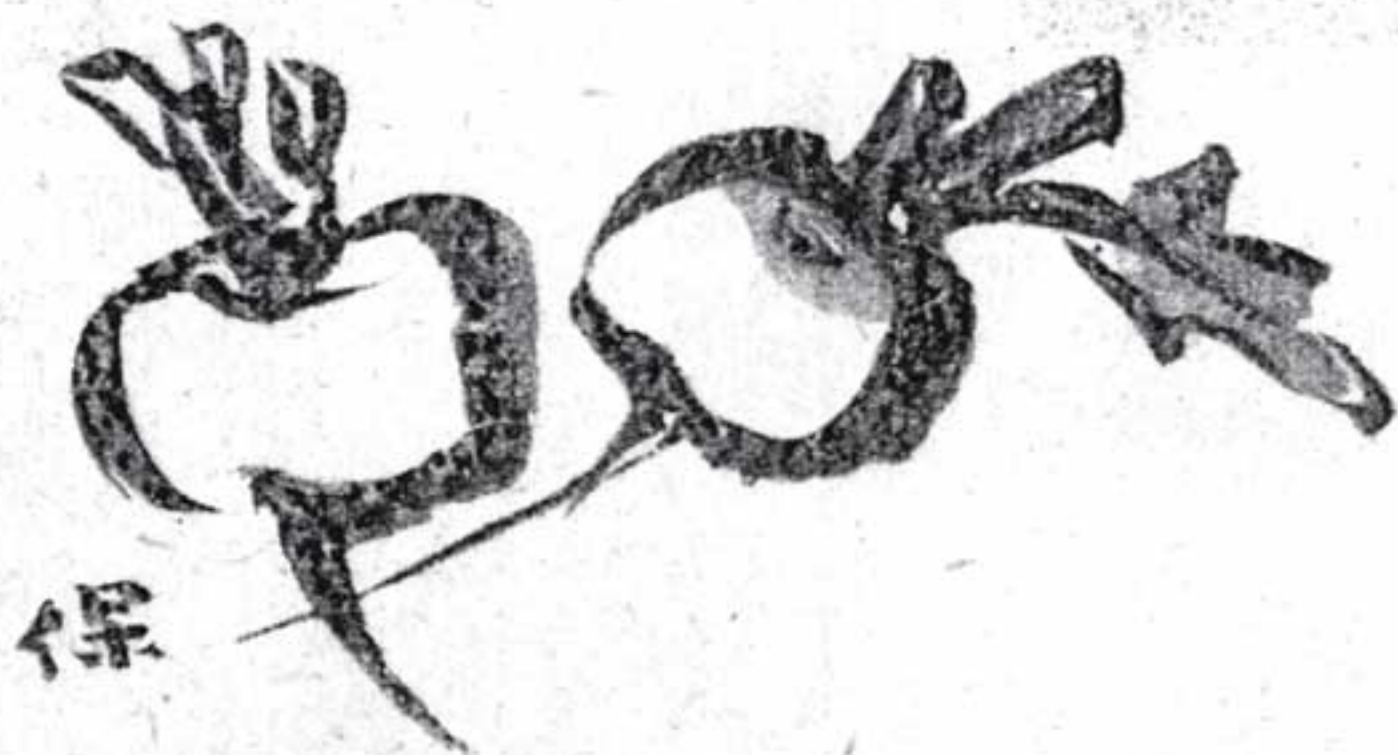
俳壇……太田耳動子選……(二七)

同信の交り(法語解説)……

……中村辨康……(二四)

編輯後記……(二八)





勅語を拜し團結を鞏くせん

第八十五臨時議會開院式に畏くも、勅語を賜ひ、その一章を拜するに
戰局日ニ危急ヲ加フ皇國カ其ノ總力ヲ擧ケテ勝ヲ決スルノ機方ニ今日ニ在リ
と宣はせられ、聖慮の程ただく、恐懼の外ないが、更にまた
奮激ヲ新ニシ團結ヲ鞏クシ奮テ敵國ノ非望ヲ破滅シ以テ皇運ヲ無窮ニ扶翼ス
ヘシ

と御諭し給ふてゐる。この一字一句を口の中で繰り返し拜してゐると、自づ
と血のわき、奮起の肉躍るを憶へるのである。そして今更のやうに宣戰の大詔
を拜したあの日の憤激がうつつと胸に蘇り、この三年の間果して己が努力
が完全であつたか何うか、靜かに省みては涙のわき出で、知らずして頭の下る
のを如何とも出来ないのである。

戰局は大局的にみて遺憾ながら不戰の現状にあると云ふ。もとより大詔を拜
した時、ふりかゝつた國難の大なると戰爭の容分ならざることを感じたれば
こそ、それだけ憤激も大きかつた。一億はそれ以來各々の職域にあつて出来る
だけの努力を盡した。がそれが果して完全であつたか何うかとなると、また別
の問題である。舵を操る人は船中で、石炭掘る者は坑内で確固たる覺悟と燃ゆ
る決心の下に奮闘してきた。その奮闘が戰勝への途であるとの自覺はよい。が
その自覺が誇りとなり、遂に慢心とはならなかつたか。獨善によつて他に對し
影響を與へなかつたか。ここに大きな問題がある。

總力戰とはすべての力の團結を強固にして最大能力を發揮することである。
それにも拘らず己が能率向上のためには他を省みぬものがあつた。左顧右盼は
もとより禁物だが、他を輕んじ、團結に障礙を與へた。三省すべき秋である。

内に隠れたるもの

吉田 絃二郎



徒然草に、西行法師のことが書いてある。後徳大寺の大臣の寢殿の屋根に、鳶をとまらせまい爲にと縄を張つてあつたのを西行法師が見て、「鳶の居たらむ、何かは苦しかるべき。この殿の御心さばかりにこそ」と言つて、その後は後徳大寺の大臣を訪ふことをしなくなつたといふことである。西行としては詩人らしい潔癖さである。

或る時兼好法師は綾の小路の宮の在します小坂殿の棟に縄を張つてあるのを見て、西行のことを思ひ出した。ところで小坂殿の棟に縄を張られたのは「まことや鳥の群れて居て、池の蛙を取りければ、御覽じ悲ませ給ひて」のことであつた。かやうに縄を張られた理由がわかつて見れば、「さてはいみじくこそとおぼえしか。後徳大寺にも如何なる故かありけむ」と感じないわけにはゆかぬ。西行法師の物の感じ方には美しい點

もあるが、尙う一度見直してみなければならぬ點があつたかも知れない。人間の心は、きはめて複雑である。簡単に片付けてしまふことはできない。

たとへば墓は小さい方がゆかしいとは思ふ。だから自分の墓ならばできるだけ小さくしたい。しかし自分の親、自分の妻子の爲の墓を營むとなれば、最後の贈り物として、すこしでも立派なものをさへ上げたいと思ふやうになる。それが人情である。墓一つ見るにもその邊の人情の機微を忘れてはならぬ。

自分が頑健である間は他人の病の苦しさはわからない。健康な人はやゝもすれば、病める人に對して知らず知らずの間に残忍な仕打ちさへしてゐる。

誰れか書いてゐたことであるが、筆者は何某の教授といつた風な人であつたかと思ふ。

かれは教室に入つて、いつも右の雙手を懷に入れたまゝ講義を聴いてゐる學生を見た。教授は或る日、その學生

に向つて「君、ちやんと右の手を出して袴の上に置きたまへ」と命じた。學生は顔を赧らめた。學生は病のために右の腕を失つてゐたのであつた。

わたくしたちが、人の行爲を批判する時、この教授に似た失策を演ずることはないであらうか。

誰れでも自分の行爲については氣付かないことが多い。能を觀に行つていつも感じるものであるが、能の見物は何といつても、社會の上中流に屬する人たちである。しかも觀客としてのお行儀は必ずしも正しいとはいへない。能は見ないで、本と首つ引きである。シテが橋懸に入れば、直ぐに見物はさわくと立ち上る。舞臺にはなほワキも残り、囃子方も残つてゐる。舞臺上の人たちはお行儀よく坐つてゐるのに見物は立つてしまふ。最後の囃子方が引つ込んでしまつてから、席を立つのが見物としての正しい道徳である。茶に招かれた客が茶を喫して直ぐに茶席を立ち去るのと一般である。これでは茶道とは申されぬ。能の正しい觀賞家とは言へない。知識階級、指導階級を以つて自ら任じてゐる人々にしてこれである。

かやうな誤つた行爲は敬虔な心の不足から生まれる。一管の笛に一生を托して精進をつゞけて居る舞臺の片隅の一囃子方を忘れては正しい物の味ひ方はできない。

外國人の藝は外に顯はすことを主とし、日本人の藝は内に隠すことを主とする。わたくしの先輩で、六十一歳の團十郎が、とんぼを切つたのを見た人がある。しかもあのかさはつた、重い踊りの窮屈な獅子の衣裳を着け、あの背丈よりもあるかに長い獅子の振り毛を附けて、座敷の縁端からとんぼを切つて、庭の沓脱ぎの上にすつくと立つて見せたのである。これほどのものすごい修行が内に隠されてゐたればこそ、團十郎の藝には底に光るものがあつた。

外國の藝人であつたなら見物の前で、舞臺で、とんぼを賣り物にしたであらう。團十郎はそれを見物には隠してゐた。

先年亡くなつた歌右衛門がいつか團十郎について語つてゐた。「團十郎といふ人はおもしろい人で、セリフは稽古の間にすつかり覚えて置け。そして初日になつたらすつかり忘れてしまへと言つてゐましたよ。」團十郎の腹で演ずる芝居のこゝろがうかゞへる。

晩年歌右衛門はひどい鉛毒にかゝつて、手は顫へ、満足に箸を握ることもできなかつた。その歌右衛門が「孤城落





月」であつたらうか、侍女から薙刀を受け取つて一薙ぎ薙ぐところがあつた。そのさばきの見事さ、物凄さ、薙刀は一陣の疾風を喚んで飛ぶかに見えた。わたくしは樂屋へ行つてそのことを語つたら歌右衛門はさすがにうれしさうであつたが、

「いゝえ、手が利きませんので駄目ですよ」と言つてゐた。

病のために利かぬ手ではあるが、その内に隠されてゐる藝の力が、あれほどに鋭い太刀風となつて顯はれたものであらう。

日本に長く住んでゐた外國人があつた。或る時わたくしの家へ一抱への菊の花を持つて來て、花瓶を貸してくれと言つた。かれは花瓶を持つて行つて、しきりに花を生けてゐたが、生けられた花を見るとほとんどすべての葉は摘り取られて、花と莖ばかりの菊が瓶に並べられてあつた。日本人は花を愛するが同時にたゞ一枚の葉をも疎かにしない。葉の中にこそ花以上の美しいものを見出してゐる。つくづく日本人はすぐれた民族であることを感ずる。

或る能の名人が道成寺を演じた。いよいよ鐘入の段になり、かれは見事に鐘の中に飛び込んだ。然るにその鐘の中には後見によつて、入れられてゐるべき筈の後シテの面が忘れられてゐた。かれは咄嗟に自分の指を喰ひ切り、自分の血で顔を描いて、やがて後シテの蛇體となつて鐘から顯はれて來た。かれの至藝が眞に鬼氣迫るものとなつて舞臺一面を掩ふたことはいふまでもない。

こんな場合西洋の藝人であつたら後見を叱つてでも、舞臺の空氣を破つてゐても、鐘の中に取り入るべきものを取り寄せたであらう。日本の藝人のみが自分の指を喰ひ切つて靜かに泰然として藝をつゞけて行く。

世界に比類なきこの民族！

砲彈に張るお守り札

敵の大軍を遡へ孤壘を守つて實に百餘日に亘り鬼神も哭かした奮闘をなした拉孟守備隊の血戦記は、儒夫なほ起たしむるの感激を覺へさせる。お祭りの提燈行列のやうに灯をつけて目前を行く敵軍をみなながら、そしてそこに一發ぶち込んでやれば、大撃を與へ得ることが判つてゐながら、彈藥の缺乏のため撃つてなかつた將兵の口惜しさ。その切齒扼腕ぶりが目に見えて、話を聞く者涙なしにゐられよう。敵が見える、撃つて下さい」と残り少ない彈藥を氣にしつゝ絶叫し戦死して行つた勇士を考へるとただ頭がさがる。一發の手榴彈にも拜んでから敵に投げ、肌身離さぬお守り札を一發づゝの砲彈に括りつけて敵陣地に撃ち込んだといふ。きつと仇はうつ！と思はず叫ばずにはゐられない。



義村の來迎會

佐藤賢順

鎌倉時代の宗教文化について深い關心を持つやうになつてからは、散歩の時にもなるべくその頃の文化的な遺品のありさうな所を氣をつけて歩いたりしたが、收穫も相當あつた。私は鎌倉の中頃までの文化的特質を純粹な而も高い意味の情緒的感傷性にあると考へてゐる。禪宗が入つてからの武士階級の信仰は餘程違つてくるが、中期までは舊佛教の系統を引く信仰についてもさういへるし、專修念佛の新興佛教は勿論さうである。今はその情緒的感傷性について委しく述べるつもりはないが、どんな宗教文化も情緒的、感傷的でないものはないといふ人があるかもしれないので、思索的な傾向の強い宗教や苦行主義のそれを思ひ浮べてそれらと對比してみたらはつきりするだらうと言つておきたい。

その頃の古い文獻に三浦義村が彌陀來迎の講會を催したといふ話があるが、私はこれにかなり氣を惹かれてゐる。それは大がかりな

來迎講であつた。三浦義村といふ人は今の三浦半島一帯の地の領主で、三浦家としては六代目位の人に當りその父の義澄の時から父と共に頼朝に仕へ、源家三代に忠誠を抽んでた。源家が亡んで北條執權の世となつてからは、いよいよ重く用ひられた様子で畠山重忠や和田義盛などと共に、幕府の宿老として、樞機に參劔した。常に北條義時泰時の側にあつたので内政や執權職の繼承の問題など重要な事項にはいつも相談に乗つたらしく大方便の名が出てゐる。頼朝の行列に先陣を承つて、隨兵十人の中に名を列ねた若い頃の三浦平六兵衛尉義村から、延應元年に前發河守正五位下平朝臣義村として卒去するまで彼の名は殆んど五十年間に涉つて記録に散見するのでこれによつて義村が源・北條時代に幅闊く行動した足跡を想像することができるとに角、うるさい時代で古い功臣も謀られたり誣ひられたり陥れられたりさうで

なければ自分から背いてゆく者が多い時に主君は何代か變つても一生を仕へ通したといふのであるから、神經の太い武人であつたらうと思はれる。

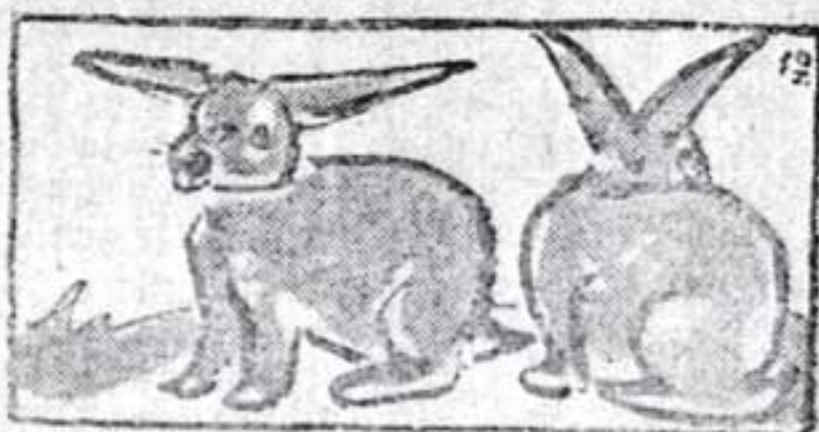
この人が三浦三崎の濱で盛んなる來迎講の催しをしたことがある。今から考へると如何にも伸びりとした遊戲で、芝居がかりの騒ぎのやうにも思はれるが、當時の人々にとつては、深くめいめいの内部生活と結びついた清興で、直接に日常の起居と觸れてゐた催しであつた。

時は安貞三年であるから、義村の年齢は内輪に見積つても六十を越してゐた頃である。春の彼岸の二十一日に聖衆來迎の粧ひをするといふので、將軍や執權を招いた。將軍職には實朝の亡いあとを受けて藤原頼經が迎へられて据えられ、北條泰時が執權職に就いて實權を掌握してゐた。招かれたので將軍頼經と泰時夫人とは前日から三崎へ出かけて行つた。來迎講の催されるその日は、天霽れて風靜かでよい日和であつた。この催しは豫ねて伊豆走湯山の淨蓮房に一任されてゐたので、出度萬端は手ぬかりなく整へられてゐた。さてその日の迎講の有様はどうであるかと

いふと、盡過ぎになつて將軍賴經を乗せた舟が磯近くに碇を下し、御供の小舟數百艘がそれに従つて水に泛んで、彌陀の來迎を今や遅しと待つてゐた。傳へ聞いた群集も、濱邊から山手一帯を埋め盡してこれもまた御來迎を待ちあぐんでゐる。すると遙か彼方の岬の影から、十餘艘の舟が次ぎ次ぎに姿を現して汀をさして漕ぎ寄せてくる。舟はどれも紫雲の色に染め出した幕を張り巡らし、金銀の金具、五色の綵などで粧ひ、さながら七寶莊嚴の如くで、幢幡は海風に翻り、天蓋には青龍、金鳳、孔雀、迦陵頻伽を造つて取りつけてあるのが、陽の光を受けてキラキラと輝いてゐる。この舟が近づいてくるにつれて、風靜かな海の面に管絃の響が、夢のやうに聞えてきた。近在近郷から集つてきた見物人達、は、野を埋め山に滿ちて、この光景を眺めてゐたが、初め冷かし半分で見てゐた連中も、いつかつり込まれて、本氣になつていつた。誰の趣向であつたか、どこで焚いてゐるのか、そのうちに沈檀香の匂が濱風に送られてきたので、感嘆の聲を放つて、物の本に異香懸すとあるのはこの事であらう、などと語り合ふ者もあつた。來迎の舟はいよいよ近づい

てくる。金銀五色の蓮の花舞が撒かれて、それが翻々として舟の上、水の上に降る。樂の音はいよいよ近く聞えてくる。見ると舟の面には菩薩の面を被り菩薩の粧をした美しい姿が一人立ち現れた。兩手で紫金蓮臺を捧げてゐる。觀音菩薩である。その次に勢至菩薩の合掌の姿が現れ給ふた。二菩薩の中程には阿彌陀如來のお姿が、粧も一段と美しく麗々として威神邊を拂ふが如くに現れ給ふた。その後には、山海惠菩薩以下の二十五菩薩が、羯鼓・笛・琵琶・篳篥・笙などを奏でて靜かに讃くのであつた。舟は二階造りに拵へてあつて紫の幕は下に張り巡らされてあるので如來と二十五菩薩は紫雲に乗つて來迎し給ふたかのやうに見える。かうして來迎圖像にある通りの有様が目の前に展開されるので、見物の老若は西方極樂に迎へ取られる心地がして、隨喜の涙を流した。古い記録には、その時の有様が、「莊嚴の粧、夕陽の光に映え、伎樂の音、晚浪の響を添えるが如くなり」と書かれてゐる。やがて來迎の舟はいづこともなく漕ぎ隠れて、今日の催しも終るといふことになる。將軍はその夜、三崎に泊して翌日鎌倉へ歸つた。

來迎の講會は遠く惠心僧都に始まると傳へられるが、それはどんな形式で営まれたものか詳細は知る由もない。然し鎌倉時代までには大體、形式も定まつて、いま見るやうな催しとして庶民の信仰生活と直接に結びついてゐたものである。義村は武骨一偏の武人に過ぎなかつたが、それだけにその心情には卒直な仰信的氣風があつたのに相違ない。それはただに義村一人のことではない。貴賤を問はず老若を分たず、皆等しくかうした美はしい情緒的な信仰に生きてゐたのである。私はこれに似た物語を隨處で採集した。十所、二所の光觸寺の頼朝阿彌陀の傳説などもその一つである。また或る日、光明寺の觀經曼陀羅の前に立つた時などは、その頃の人々がどんなにか敬虔な心持でこの圖像の前に平れ伏し、どんなにか美はしい純情でここに描かれてゐるままを受けとり、この世界に憧れ、その中に生きること願つたかがよく解つた。情緒的といつても、この世界は、ただ夢のやうに描かれた妄想の世界ではなくて、有の世界である。有をその最も高い意味にまで追逼して初めて得られる妙有の世界である。そのことについては次の機會に譲らう。



醫學と宗教

醫學博士 式場隆三郎

原始時代の醫師は僧侶をかね魔術師をかねてゐた。いやその時代には、醫、僧、魔の區別はなく、一體なのであつた。その後文化が進むにつれ、原始宗教も發達し、それに醫藥を伴つたのである。醫學と宗教の結合は、かくて原始時代から近代までつゞいた。これが判然と分離したのは、幕末からであらう。そして西洋醫學の輸入がこの機運を助成したのであつた。しかし、醫術と宗教が一つであつたのは、東洋も西洋も同じであつた。ただ近代科學の發達につれ、分科が行はれ、醫術と宗教をも分離せしめたのである。もつともこの分離には、在來の唯心的傾向を排し、唯物論的傾向に起りすぎたことも大きな原因の一つをなしてゐる。

原始とまではゆかずとも、古代の僧侶は

魂を救ふとともに、身體をも救はうとした。かくて僧侶が醫術を行ふことになつたのである。しかし、文化が進むと實證主義が旺んになり醫術から精神的の面を排除してしまつたのである。かくて明治、大正は歐風醫學の萬能時代であつて、宗教による醫藥を迷妄と斷じ、迷信として極力排斥したのであつた。だが昭和に入つて自然科學が一層發達するに及んで、かへつて科學萬能主義の誤謬が指摘され、自然科學の中にある精神科學の發達を促すにいたつた。かくて醫學と宗教はまた新しい結びつきを見出したのである。もとより原始宗教時代や古代宗教における醫術は、現代では否定されねばならぬ。また宗教萬能思想による宗教的醫術もそのまゝでは首肯されない。ましてや邪教や偽似宗教による非科學的醫術にいたつては、極力排斥しなければならぬ。しかし、醫術における宗教性は、大いに採用されてよいのである。醫術が單な

法 腹のつくり方

佛教で四分別といふことを云ふが、これはものをはつきりと見分けることで、そこから適當なものを見出すことである。この四分別をわかり易く、腹と徳といふことに例にとつて云へば、

- 一、徳あつて腹のない人
 - 二、腹あつて、徳なき人
 - 三、徳も腹もない人
 - 四、徳も腹も兼備してゐる人
- と四つに分別することが出来る。さて徳あつて腹のない人は、狼狽へる人でほんとの仕事は出来ない。腹あつて徳なきには亂暴が多き窮極の成功は出来ない。徳も腹もなくでは問題外の人である。そして徳と腹と兼備した人こそ圓滿な人格者なのである、しからばかくの如き腹と徳と兼備した人になる人はどうすればよいか、昔からいろいろの方法がある。腹を作るといふことは、先づ大體、泰然不動の精神に住することで、如何なることに當つてもビクつかぬ、うろたへぬことで、あくまで理智の批判を誤らないことである。このうろたへるといふことにはまた四つの原因が

る技術でなく、精神的の面をもち、ことに宗教性をもつことは、正しい。現代の醫學者や醫師は、治療にあつて宗教的思想なしに、完全な職務を果すことはできない。醫學は病氣だけを治すのでなく、人を治すのである。いや人を救ふのである。そのためには、精神的の面を無視して藥物や手術だけにたよることはできない。その精神的要素は、宗教性であらねばならぬ。醫術はいまやその本來の姿にかへり、宗教と一體になつてこそ、初めて高度の完成をみるのである。

醫學はまだ未完成の科學である。だからそののみでは力が及ばないので、宗教の力をかりるのではない。醫學はいかに發達しても、やはり宗教性をもたねばならないのである。病氣は心身ともに治療されねばならぬものである。そのためには醫師は單なる技術者であつてはならぬ。人格者でなく、宗教家であつてこそ、初めて完全の治療ができるのである。

ただこゝに注意しなければならぬのは、醫學者の宗教的教養である。これは現代の低俗な職業的僧侶のやうな教養であつてはならぬ。醫學者が説教できたり御機嫌をよめるだけではないのではない。もつと高い宗教的教養を身

につけなければ、意味がない。醫學者が宗教性の自覺と修養によつて、一層その醫術が向上し光輝を發するやうなものでなければならぬ。宗教家が醫學を學んでも、醫學者が宗教を學んでもよい。今までのやうに反目し排斥しあつてゐては、患者は救はれない。協力によるか、ひとりで兩者をかねるか、この二つの道以外にはない。

あらゆる病氣は、醫學者が治すのではない。患者自身が治すのである。病氣は自然に治らうとする力をもつてゐる。その自然治癒力を善導し、促進するのが醫師の役目である。藥物の投與も、手術もこの意味である。患者が醫者のみを使ひにし、醫者が自力を過信しては、全き治療は望まれぬのである。患者は自ら治る力をもつことを信じ、醫者はそれを患者に自覺させ、患者と醫者とが一體とならねば、病氣は治り難いのである。

神經病や精神病は、かつて魔物がついたものとして、醫藥を受けず迫害されたものである。また宗教によつて救はれようと試みられたものである。しかし、精神病學と神經病學の進歩は、この離治の病氣をも救ふ道を發見した。しかし、まだ醫術では足りない治療の未

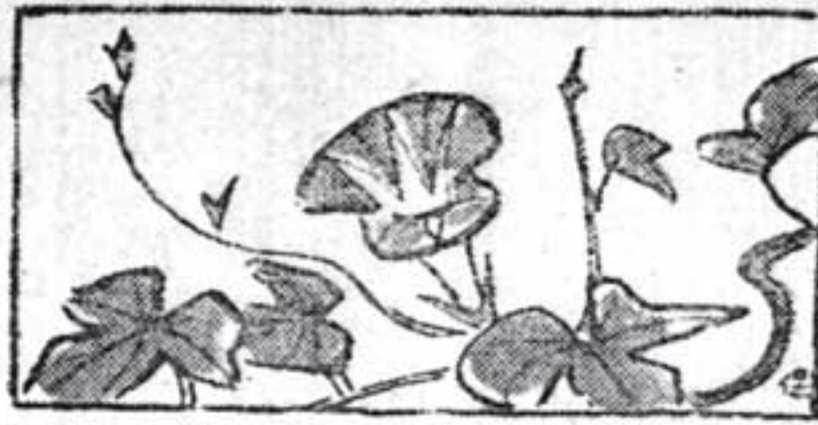
ある。第一は誠がなければならぬ。誠があれば千萬人と雖も我れ行かんの氣概が出てくる。佛教では「正を踏んで恐れず」と云ひ、正さへ踏んでゐれば天地間に恐れるものは一つもない、それで腹はすわるわけである。

第二に罪なきものはうろたへない。天地神明に誓つて恥ぢない行ひをしてゐれば恐れるものは何もない。第三に力あるものはうろたへぬ。すつかり訓練された力を持つてゐるものは、物事に當つて少しもうろたへぬ。その日その日を試験日だと思つてゐれば、ほんとの試験の日にうろたへる必要がない。平常に力がついてゐれば、生死といふ大問題が起つて來ても決してうろたへぬ。何時この世にお暇をひをして差支へない。そこで不動の腹の力が出來てくる。「晴れてよし曇りてもよし富士の山一千年長生しても幸福があれば、今すぐ息を引きとつても大満足である。信仰の力を持つてゐれば、腹の力が生れてきて、人間に落ちつきが出てくる。

第四に準備が完全に備はつてゐればうろたへぬ。すべて人生は準備に力を入れることが必要である。日常生活に準備を完全にし、精神の修養を怠らずにゐれば、何時如何なる問

開地が残されてゐる。宗教性を加へねばならぬ點が澤山ある。だから現代の精神痛や神経痛の治癒とともに、正しい宗教的指導を與へることが必要である。

要するに醫術と宗教はもともと一つであり、分離すべきものではなかつた。それが相争ふやうになつたのは、不幸なことである。



南の朝顔

みなみ
あさ
がほ
榊山潤

(筆者は國府臺病院長)

そこには誤解があり。悲願があつた。しかし、いまやこの二つは最も正しい面で結びつくべきときが來た。邪道に陥らず、驕慢にならず、敬虔と眞摯な心をもつてこの二つが結ばば、難治の病氣はもつと救はれるに違ひない。

私が空路バンコックに着いたのは一月中旬であつたが、着いた翌日、兵站ホテルから本部へ行く途中で、生垣にからまつた朝顔の花を發見した。

葉は、どうやら麻に似てゐる。しかし花は、確かに朝顔であつた。内地のに較べるとずつと小さく、夕顔と朝顔の間ぐらゐの花であるが、紫に白のふちどりがあつて、爽やかな朝風にゆられる姿が可憐であつた。

私は内地を思ひ出し、なつかしさに暫くその前に佇んだ。考へれば一月の中旬である。内地は木枯の吹きすさぶ頃で、そんな季節に朝顔の花を見ることは奇異といへば奇異であるけれども周囲の烈日はさながらに内地の眞夏で、感じの上では朝顔の咲き誇るのも決して不思議ではなかつた。

それ以來、本部へ通勤する朝毎に、朝顔の花を眺めるのが愉しみであつた。氣をつけると同じ朝顔の花は、あちこちの生垣にあり、空地の樹木の幹などにもまつはりついて咲いてゐた。

題に直面しても恐れるところが無い、かゝる精神を養ふのに、佛教では戒定慧の三學を以てこれを修養してゐる。戒とは一切の惡から離れることである。一切の惡をしない、善いことは怠けずにやることである。定とは腹が定まることである。どんなに學問があり知識があつても心が動いてゐては、はつきりとも

のを見ることが出来ない。戒と定によつて出來上つてくる智慧が慧であつて、ほんとの智慧のことである。この戒定慧が一つになつて腹を作るのである。その内でも先づ戒が一番大切で、これが出來れば後は自然と備はる。白樂天が當時の名僧鳥高禪師に佛の眞髓は何かと質ねたら禪師は「よいことをして悪いことをしない、これが佛教の眞髓だ」と答へ、「これは三歳の童子も知つてゐるが、七十、八十の翁も實行が出來ない」と教へた。それ程戒の一字に徹底することは容易でない。

信念は一種の訓練であるから絶えず怠らず努力する必要がある。世間の毀譽褒貶にビク／＼するのは自分がたしか信念がないからである。信念は腹を作る。腹は強い信念であり、大信念は宗教によつて得られる。

(故岩井智海現下修養講話の一節より)

その朝顔の色は、どれもこれも同じで、内地のやうに色とりどりの美しさはなかつた。

紫に白のふちどりといふ一種類で、大ききまで揃つてゐた。私はその一つを採つて押花とした。

ビルマ作戦が始まつて間もなくの頃で、戦鬨は目ざましく活潑であつた。私はタイ北部の基地へ行き、再びバンコックに引返し、ビルマに入つた。モールメン、ラングーン、トングーと進んだ私は、しかしビルマでは、ついに同じやうな朝顔さへ発見しなかつた。さういへば、佛印でも、朝顔は見かけなかつた。朝顔のあるのはタイ國だけであらうか。その他の強烈な色彩の花々は、佛印でもタイでもビルマでも餘り違はないやうな氣がしたが――

トングーからラングーンに引返してすぐ、私はひどい Deng 熱にやられた。熱が下つてからも、身體の熱をすつかり搾りとられた感で、私はぼんやりした日々を廣い宿舎で送つた。すでに雨期に近くなつてゐて、變な云ひ方だが、ビルマの暑さも爛熱の極に達してゐた。殊に病後の私には、入陽の色が目と頭に痛かつた。落日は見事に大きく、太陽は

言葉どほり巨大な火の玉となつて、そこから火の滴がぼたぼたと垂れ落ちさうに思はれた。その代り、夜になつて月が上がるゝ、その風光はまた格別であつた。

私は月光の中をさまよひながら、平家物語の文章を思ひ出した。平家物語の痛切な哀感が、この月光から搾り出される氣持であつた。蛙が鳴き、螢が飛び、私は身の戦陣にあるを忘れたが、さういふ月光を利用して敵機がよくやつて來た。

バンコックで押花とした朝顔の紛失に氣がついたのはそんな病後の頃である。ひどく残念に思ひ、今度バンコックへ寄る時があつたら、忘れず押花に採つておかうと考へた。

ビルマ作戦は終つた。敵の一兵と雖も、すでにビルマの地上にはなかつた。雨期が來た。私は事務連絡でバンコックへ行くことになり、かたがた一週間ぐらゐの休みを貰つた。雨雲の重い空を斷つてバンコックへ飛んだが、この日は難航で高度六千以上で山脈を越へた。はげしいスコールに洗はれたバンコック郊外を眼下に眺めた美しさは、今も忘れがたい。自然の美といふものも、ひどい苦勞の後でこそ、一層豊かに美しく心に迫つて來

るのではなからうか。苦勞の多かつた旅ほど、旅の愉しい後味がいつまでも残るやうに。

バンコックも雨期であつた。一月中旬にゐた頃より、陽氣はずつと寒かつた。日に五回も六回もスコールが來た。或朝、晴れ間を見て朝顔をさがしに行つた。紫に白のふちどりのある花は、雨に打たれてしほらしく咲いてゐた。しかし、雨期に入つた花には元氣がなかつた。色もあせ、形も小さくなつてゐた。私は押花にするのを諦めた。雨期があける頃には、私は再びバンコックへ來る機會に恵まれるだらうと思つた。この時の、威勢のいい花を採らうと考へた。

後に、内地歸還の途、私はバンコックに寄つて望みどほり朝顔の花を採り、日記帳の間に押花とした。考へて見ると、バンコックに咲く朝顔は、殆んど一年ちう、休む間なく咲いてゐるのである。内地のに較べて何となく生氣がないのも、咲き疲れといふやつではなからうか。

バンコックに朝顔が咲いてゐるといふ事實は、私の從軍に一つのなつかしい色彩を加へてゐる。

信 仰 相 談 (擔當)

中 村 辨 康

信 と 雜 念 妄 念

(問) 二十九歳の處女です。胸の病で九年間も病床に居ました。今年には不思議に丈夫になり、この病氣もみ佛様の御引合せと喜び感謝合掌の日常療養生活を續けて居ります。病ある身は人生の老少不定を痛切に考へますが、何と申しても入院勝の爲にお寺詣りも出来ず、唯だ二心なくお念佛を稱へて居ります。然しどうしても妄念雜念が取れないのです。本當の信を貰いたなら雜念妄念もなくなりたい頭が下るのみでございませうか。何卒お聞かせに預りたりございます。(北海道。山崎美治子)

(答) 二心なくお念佛の唱へられることは極めて有り難いことであり、誠に一大事因縁の然らしめたからでこそあります。ことに御病氣に對しても感謝合掌の出来ることは此の上もないお幸せのことです、中々普通の人の出来ることではありません。逆境に處してもその逆境を如來様の御恩寵として喜べる心境に達することがむしろ信仰の極地であらふと思ひます。それでこそ本當に信仰を貰いた人と云へると思ひます。

但し雜念妄念のことは古來多くの人々はこの問題になやんだのでありまして古今何れも同じであります。私達もまたこの問題になやんで居るのですがこれは人間の通有性であります。一心に念佛して居りますと、時には雜念妄念が起らないで心の澄む時もあります。それは一瞬の時に過ぎなく多くは雜念際であつて人間の心と云ふものは全く仕末におへないものであります。法然上人も人の「瞋」から眼鼻を取る事が出来ないのと同じやうに人の心から雜念妄念を取り去ることは困難である」と仰せられて居ります。さればと云つて雜念妄念の起るがまゝに平氣で居てよいと云ふことも出来ません。それで法然上人は「雜念が起るにつけても念佛して居れば、その内には三業が調ふて正念になる」とも仰せられました。懺むところに本氣の「修」があり、その懺みがやがて「證悟」ともなるのでありますから、懺まず屈せず念佛するより外に手はありません。

一體雜念妄念の起るのを極むのは信仰が進んで居ることを證明するものであつて、世間には雜念妄念の起るのを少しも氣にして居ない人が澤山に居ります。ですからそれを考へますと大いに喜んでよいわけでもありません。またこの雜念妄念のなくなるこ

とが容易く出来ますやうなれば寧ろ念佛稱名の必要はないのであり他力にすがらなければならないのであります。そう云ふ人は自力聖道門の修行を立派にやつてのけられる人でせう。然しながら理窟の上ではさう言ひ得ましても實際はそれが出来ないからこそ、古來の名僧知識も如來様におすがりして南無阿彌陀佛／＼と唱へたのであり、私達もまたそのやうにおすがりして居るのであります。念佛は正念になることを目的として居るものではなく、正念になることさへ出来ない淺ましい凡夫なればこそ、如來様におすがりするのであります。即ち南無阿彌陀佛とは如來様におすがりする心を口に出す言葉と御考へ下さればよろしいのであります。雜念妄念の拂つても拂つても次々と起る愚かものなればこそといふ／＼頭を下げて如來様におすがり申すべきであります。

祖先の因と子孫の果

(問)

善因善果惡因惡果の法則

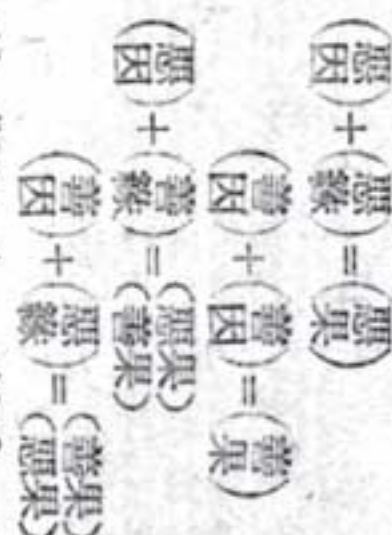
は衆知のことですが、然し世間には非道な悪い事をして居ても幸福な生活をする人と、善の目にも善い人だ、よく働く人だと思はれるのに悲境に泣いて居る人もあります。或宗教ではこれを先祖の業が子孫に廻つて来るのだと言ひます。果してさうでせうか。(大阪)

新池田町・長谷川榮一郎

(答)

佛教でも因果を説きます

が、それは勸誡門のものであつて、謂はゞ「幼學便覽」であります。例へば「嘘を言ふと閻魔様に舌をぬかれますよ」と子供を戒める方便としてよくこの因果が用ひられるのであります。此の因果の道理が一應分りますと、今度は因果と云つて堅の關係ばかりでなく、横の關係をも考慮に入れて考へるやうになります。即ち惡因があつても善縁を以て之を補へば必ずしも惡果を受けないし善因があつても惡縁がむらがり起れば逆に惡果を受ける場合がないとは言へないのであります。質問の第一はこの點に關する疑問のやうに存じますが、之を圖に示しますと



縁の強弱に依つて結果が二様になるのですからそこに道徳も強張されるのですし悔ひ改ためることの可能もあるわけであります。これが分りますと今度は「縁起」と云つて一切を縁即ち條件と見て一縁去り一縁來り刻々に變化して行く人世の眞實相に覺めて行くのです。果を考へるうちはまだ「我觀」が取れて居りません。一切は縁であり刻々の縁を整理してよりよき向上を計る佛道の修行が「我」の觀念を段々に消散させるわけで

あります。然しながらそれは中々容易ではありません。理窟ではさうでも人間感情と云ふものは誠に根深いものであります。茲に「法性々起」の問應「本願強縁」の問應が起るのですがそれ等は専門的になりますから省略させて置きませんが、簡單に申しますと例へば親子の關係に於て不良の子供も親の氣持では絶対に「い」はないのであつて心からその子を悲しみ慈しむのであります。成る程悪いことをする度に心をいたため悲しみもしますがその子の本來の性質が惡質であらうとは決して思つて居りません。誘惑にまけて一時的に不良になつたので、それも畢竟友達が悪いからだと思つて居るのが有難い親心なのであります。随つて親は必ず心が改まれば善人になり得ると確信して居るのであります。また事實その通りで善良な子にもなり得るのであり心機一轉しさえすれば眞面目なシツカリした青年

にもなり得るのであります。よく赤の思想にかぶれた子供が母親の涙に依つて轉向した例が澤山ありますが、此の轉向が即ち天地の道理が個の上に現はれた「法性々起」の事實であり、その親の慈悲心が「本願強縁」の一表現なのであります。かゝる見地に立つとき因果論は勸誡門としては分り易いが理論としては極めて幼稚であつて實際に即して居ないことがおわかりであらうと存じます。以上の説明で善因必ずしも善果を將來せず惡因必ずしも惡果を將來しないことがお分りになつたことと存じます。次に祖先や親のなした業が子孫に廻るかと云ふお買ねですが、それは影響として廻るものであると信じます。例へば親のために財産が子孫に残されると云ふ事實をどう御覽になりますか。物質的影響があると同様に精神的なものも影響がある筈であつてそれは決して否定出来ない事實と思ひます。



言ふなのお地藏様

安倍 季雄

東海道線の

米原から敦

賀、福井金

澤、富山に出

る北陸線の汽

車はまだでなかつたころ、福井縣の武生か

ら敦賀に出るには、木の芽たうげといふ、け

はしいお山をこえたものです。

その木の芽たうげのテッペンに、「言ふなの

お地藏様」といふ、名高いお地藏様がまつら

れてあります。弘法大師のお作とつたへら

れ、今も近村近がうの人々から、あらたかな

お地藏様としてあがめられてゐます。

「言ふなのお地藏様——どうしてそんなお

名前がついたかといふと……」。

明治御維新前のお話であります。

毎年、旅あきないをしてあるく、越中富山

のくすりやさんに、吉兵衛さんといふ男があ

りました。

今年も、中國から四國をまはつてのかへり

道、重い財布をおみやげに、故郷にいそぐひ

とり旅、木の芽たうげの西ふもと、敦賀郡の

東郷村についたのが、今の時間にして三時ご

ろ、くれるに早い秋の日がもう大ぶ西にまは

つてゐました。親切な茶店のおちいさんが、

「吉兵衛さんや、今夜はこゝにおとまりなさ

い。近ごろ、このたうげはぶつさうでな、夕

方になるとおひはぎがでるといふ評判ぢや。

山ごしはあしたになさい。」ととめました。

「なあに、時間もまだ早いし、ちと先きをい

そぎますで、思ひきつて出かけませう。」と吉

兵衛さんは氣にもとめず、毎年歩きなれたた

うげ路を、スタ／＼のぼつてまゐりました

が、ちやうどお地藏様の前にさしかゝつた

時、突然、たうげのむかふがは、うすぐらい

木の下かげで、何かしきりに言ひあらそつて

ゐる人ごゑがいたしますので、何だらうとす

かして見ると、一人は商人らしい小男で一人

くるやうです。

吉兵衛さんは、テッキリ、うはさにきいた

おひはぎだなと思ひました。じぶんもつかま

つては大へんと、いそいで地藏様のうしろに

かくれ、息をこらして様子を見てをりました。

大男は、こはい顔をしてどなりました。

「さア、早くその金をこつちへよこせ。グッ

／＼いふと生命はないぞ。」

「ゆるして下さい／＼。このお金は御主人様

の大じなお金……」。

「やかましい。これでもか！——と、悪者が、

半分おどかしのつもりでつき出した刀が、も

ののはづみで、商人の横ッ腹に、づぶりとつ

きさゝつたからたまりません。商人は、ウー

ンと一聲、そのまゝバツタリ前に倒れました。

「とう／＼死んでしまつたか。もろいやつち

や。」と舌うちをした悪者は、いきなり商人の

ふところの手をさしいれ、財布や金目の品物

をぬすみとり、あたりをヂロリと見まはしま

は雲つくやうな大男
です。事情は分らぬ
が、逃げようとする
小男を、大男は逃が
すまいと追ひかけて

したが、ふと、そこに、無想無念でたつてござる地藏様のおすがたを見ると、さすがに良心がとがめたか、その前に両手をついて、

『南無地藏様、どうぞ今日の事は見て見ぬふり、誰にも言はないやうにお頼みいたします。』と言つて、ひたいを大地にすりつけました。

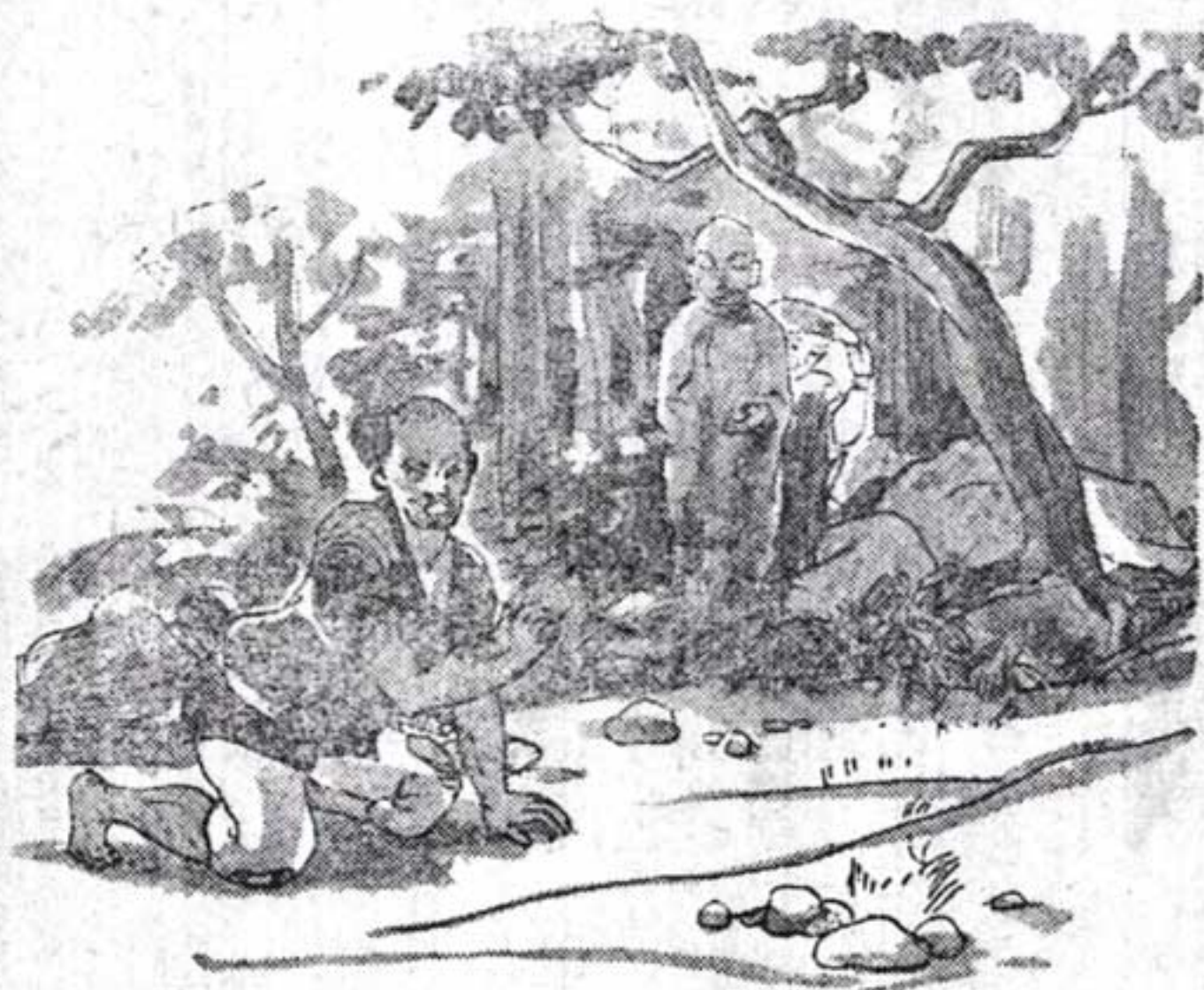
地藏様の後にかくれてゐる吉兵衛さん、なんと、かつてな奴だらうと、腹がたつてたまりませんが、出ればじぶんもころされるにきまつてゐますから、うつかりすがたを見せるわけにゆきません。いろ／＼考へたあげく、地藏様のこはいろをつかつて、

『おれは言はぬ。お前言ふな。』と、大きな聲でどなりました。

悪者はきもをつぶしました。テツキリ石の地藏様が、口をきかれたと思つたのです。

『へーえー！』と言つたと思ふと、ぬすみとつたお金も手荷物もおつぱり出して、雲をかすみと逃げ出しました。

あと見おくつて吉兵衛さんは、大いそぎで



旅人の死がい在地蔵様のうしろにはふわり、悪者がおいて行つたお金と手荷物をもつて、

南條村にかけつけ村役人にくはしく其むねをときいで、一日も早く悪者をつかまへ、旅人のかたきをとつて下さるやうに、くれ／＼

もお願ひして。富山のお家にかへりました。その事があつてから半年ばかりたつた或る日の事、村役人が用事があつて、武生の宿屋にとまつてゐますと、となりのへやで二人の旅人が、何やらコソ／＼話して居ます。

『おい木の芽たうげの地藏様はばけ地藏だぞ。いつか、わしがあの前で休んでゐるとな、おれは言はぬ、お前言ふなとハッキリどなつたぞ。あんなこはいと思つた事はないよ。』と一人の男が申しました。

役人は、さてはと思ひました。半年前、木の芽たうげのお地藏様の前で、旅人を殺して逃げた悪者は、この男にちがひないと思ひましたから、間のふすまをガラリとあけ、『悪者、御用だ！』と申しますと、其の男は思はずそのばにへたばつて、『おそれ入りました。』と、後に両手をまはしました。

『木の芽たうげのお地藏様はあらたかぢや。人ごろしの悪人をつかまへて下すつた。』といふ評判が國中にひろまると、吾も／＼と参詣にまゐる人で大にぎはひ、みんなでお金を出しあつて、立派なお堂をつくつてその中に勧請しました。『言ふな地藏様』として今もなほ所の人々に崇められてをりますとさ。



貧富貴賤
を越えた

同信の交り

法然上人御法語解説(其三十四)

中村 辨 康

法語

おなじ心に極樂を願ひ、念佛を申さん人をば、たとひ卑賤の人なりとも、父母師匠にもおとらず思召すべし。今生の財寶の乏しからんにも力を加へ給ふべし。またすこし(にて)も念佛に心をかけ候はん(人)をば、能く(信仰の増進すべきやう)すゝめ給ふべく候。是も彌陀如來への御みやづかへを思し召し候べし。(鎌倉二位禪尼へ進する御返事「法語抄二四〇—二四一」)

解説

何と云つても世の中の交際で最も味ひの深いものは同信の友との間のことでありませう。親子夫婦の間柄よりも亦た一種違つた親しさを感じ合ふものであり、順逆共にシミジミと語り合ひなぐさめ合ふことに依つて一層親しさの度を加へて離れがたい氣持を増すものであります。それは畢竟人生の最大問題たる「老病死」に就いて共感共行するからであらうかと存じます。信仰の中には必ず何かの形で「死生觀」が伴つて居るも

のであります、罪惡觀そのものは矢張その根底に死生觀が横たはつて居るのでありますから「死生觀」の解決こそは人生に於ける最も重大な問題でなければなりません。無論そんなことはチツトモ考へないで、空々寂々謂ゆる醉生夢死で一生を終る人もありませうが、それは論外であります。誠に人間に取つて「死」の解決こそは最も重要な事であつて、これ故にこそ多くの人達が求道し修行し苦心し煩悶したのであり、また現にして居るのであります。

こゝに信仰が生れ宗教があつたのであります。無論これだけが信仰であり宗教であると云ふのではありませんが、主としてこの悩みの解決に役立つものが信仰であり宗教であつたのであります。それ故にこの最も大事な死生遠觀を與へる信の確立について、それが念佛であり淨土への往生である時、この信仰に依つて養はれる感情は兄弟以上夫婦以上の親しさを感じ

合へるものであつて、或は父母とも或は師匠とも頼む氣持になるのであります。

其處にはもう貧富貴賤の差別は考へられませんか。皆な同行であり同朋であり同胞であります。ですから困る時は互ひに助け合ひ頼み合つてよいのであります。イヤ事實現に助け合つて居る人々もあるのであります。

若し私達の間にそれが出来て居ないならば、それは何方に缺點があり双方に一致し難い點があるからであつて、それは決して完全なる同信とは言はれないのであります。

疲るれば道長し

法句經に「寢ねざれば夜長く、疲るれば道長く、愚なれば生死長し」(國民座右銘)とある。寢ずに起きてゐる者には夜は伸々明けぬ。疲れて足をひきずりながら行く者には僅かな道も遠い。愚かで悟るところなき者には、無明の一生は長い。而してこれらは皆正しい教法を知らぬからだと教へる。自信のないものには仕事の能率があがらない。自覺なきものには必勝の信念が湧き得ず、従つて戦ひに勝つことは出来ない。われわれ國民は千四百年に亘つて佛教により教へられ、佛教により導かれてきた。これはわが國が文字を持つてゐた年代よりも古く長い。われわれは今こそ正法をます／＼發揮させて、その教へと文化を大東亞諸民族に弛ち興へて俱に生長し榮へてゆかんといい誇りと努力を持ちたいものである。

この御法語は鎌倉二位の禪尼北條政子がわざわざ蓮上房尊覺と云ふものを使者として法然上人にこまごまと手紙で質問されたのに對してお返事なされた消息の中の一節であります。

無論この時代に於いては貴賤の差が直ちに富者貧者の差であつたのであり、事實一般論的に位高きものは富みたるものでもあり、位なく賤しきものは貧困者であつて、そこに富貴と卑賤とがハッキリ區別されて居たのであります。

随つて二位の禪尼の如きは貴人であり富者でありましたから、貧困な同信者に物質的助力をするくらゐのことは何でもなかつたことと存じますが、然しそこによい機會がない限り、よし親近者に恵むことは數あつても、縁の遠い貧困な念佛者に恵むと云ふことは誠に困難なことではなかつたかと思ひます。

況してそれ等の者へ呼びかけて信仰の増進を激勵してやるなどと云ふことは容易なことではなかつたのであります。

また尼將軍とも言はれる程の地位に居ては決して迂闊な行爲は出来ないであります。然しかうした一宗の開祖たるべき高德の方からすゝめられて見れば、それが極めて自然なよい理由として色々な善行爲をなすきつかけともなり得たのであります。これは行政上から云つても誠によろし

いことであり、天下の人心安定の上に取つても極めて大きな効果をもたらすものであらうと存じます。

然し法然上人に見れば何も敢てそんな政策上のことまで考慮に入れられた譯ではありませんまい。誠に自然のまゝなる同信の純な氣持の流露に過ぎないのであります。

しかもそこには一億一心の働きのあつて居るのを見ることが出来ます。かうした中に淨土的な性格がことをも考へさせられます。おのづから表現されて居るのを見ることが出来ます。謂ゆる「諸上善人俱會一處」であつて、そこに貴賤貧富上下の差別のない世界が現出するのであります。聖道門の教旨に於てもさうした考へが全然ないとは云へませんけれども、それは成佛者が自ら佛國土を建設する建前でありますから、佛それ自らともその國の衆生とは主と民との關係であり師匠と弟子との關係であつて、そこに上下の差別があるかのやうに見られ、同信同胞同行の「諸上善人俱會一處」の事實が明瞭に出て來ないのであります。

この貧富差別なき思想と事實とは明かに淨土門のものであります。

既に一家であり親子兄弟の間柄であつて見ればどちらが親であるとしても子であるとしてもそれは結局同じことであつて相互に助け合ふ氣持が必ず自然に湧いて來るのであります。そこには他人らしく報酬を望む考へなどは絶対に

あり得ないのであります。

北條政子尼公が法然上人のすゝめに従つてそれを實行したか何うかはよく判りませんが、信仰も果して念佛專修であつたか何うかも分りませんが、津戸の三郎爲守が頼朝右幕下の菩提を弔ふために持佛堂を建てた時、政子尼公が頼朝公の遺物と共に若干の扶持米を付けたと言ふことや、また熊野參詣の爲に上洛した際に、朝廷からの御召には「田舎者で禮儀を知らないから」と云ふ理由で御辭退中上げたにも拘らず、法然上人の庵室にはひそかに自ら訪問して念佛のことをたづねられたと云ふことなどを考へ合はしますとき充分に念佛信仰に關心を持つて居られたことが考へられるのであります。

然かも九條兼實公と右大將頼朝とは極めて親しく互ひに肝膽照した間柄でありましたから、兼實公を通じて尼公に對し相當に念佛信仰が吹き込まれたであらうことも想像し得られます。

さればこの消息全體を眺めますと、法然上人としては相當に強いお言葉を以てすゝめて居られ且つ言ひ切つても居られますから、かなり深い宗教的交渉があつたことを見逃がすことは出来ません。

同心の交りこそは浮世の中に於ける最も淨い交りであると思ひます。

壇歌

名古屋 玉相耕順



投稿官製ハガキにて編
規定 輯部歌壇係宛へ

いつしかに忘るるものをしらはすの今年も咲けば亡き妻を戀ふ
評 しづかになつかしき作なり、たとへば月光を浴びて山水に對する
が如し

鳥根縣 渡邊實雄

疾く癒えてとく征けかしとたらちねの文來ぬ見つつこころ勇むも
評 療養所にある軍人を鼓舞して立たしめる力は家族の愛情であらう
身傷いても再び三度の再起を思へば前途洋々輝くこととしてである。

鳥根縣 小林好明

水漬きし友の戦死をしのびつつ磯邊を行けば波荒々し
評 海で戦死した友を、傷いて海邊の療養所にある兵が思ひ出して感
清のたかぶるのを抑へかねた聲である。波荒々しの終句に戦の苛
烈さも、武運の拙きを嘆く思ひも表現されてゐる。

栃木縣 大輪清

鉄とりて、日の照る下に汗干しぬみいくさの世に解意すべしや
鳥根縣療養所 渡邊實雄

揚塔の作業終れり曉の月に出船の用意を急ぐ
名古屋 鶴田稱真

工場の塀一列に夕日うけ咲く日まわりに秋の風ふく
北海道 山崎ふじ子

戦は日毎烈しくなりゆくやわが涙など遠き世のもの
愛知縣 田中民五郎

すぐれたる智恵すてたまひひたすらに念佛申せとよき人の云ふ

慰問浄土に御返送下され深謝いたします

御高覽すみの本誌を「慰問浄土」にと多数御返送下され、御芳志の段
厚く御禮申し上げます。當方にてはこれらを括めて隨時各地の陸海軍病
院に送つておます。しかしながら従來は「慰問浄土」として毎月三千部
以上を要してゐただけ只今は部数不足に悩んでおます。何卒この上とも
に一冊も多く白衣の勇士に法味をおわけ出来やう御寄贈願ひたく、
尚御寄贈誌は眞の餘白に住所芳名を御記入下され、また帯封には「慰
問浄土」と明記下さるやう願ひます。

壇俳

名古屋 松橋進



投稿官製ハガキにて編
規定 輯部俳壇係宛へ

金魚飼ひて風つゝ抜けの部屋に臥す
弘前 安田 武

神様のほとりに生れ蟬青し
三重 潮澤 紫花

うちみづに應へてさきぬ月見草
東京 坂口 康夫

夏空を翔りとも人あまた征く
高知 竹原 教圓

風鈴のそよろに宵の來りけり
鳥根 渡邊 實雄

緑青し子雀一羽枝を歩む
名古屋 山田 順證

夕焼けの煙に滲む水やりにけり
北海道 山崎 藤光

薬草をひさしに干して無醫の村
三重 澤 諦準

夕焼けの煙に滲む水やりにけり
名古屋 熊澤 秀國

涼さの朝ひととき書を習ふ
東京 佐藤 英明

哨直を了りて銀河仰ぐなり
鳥根 渡邊 泉洞

参観の讀經の聲や秋きたる
兵庫 池田 盛雄

雄子啼くふる里の道白々と
岡谷 久保田 穰

ひらくと木の葉散りいで秋の風
青森 丸尾 傳山

玫瑰や露の上なる啄木碑
北海道 高嶋 喜八郎

蚊を追ふて洗ふひまなき浴かな
名古屋 鶴田 秋眞

寫眞とるどの子の顔も黒きこと
名古屋 松橋 進

虹の窓高きに兒等の背のびして
東京 山本 竹泉

黒々と藪薺の道秋くるゝ
栃木 大輪 清

宮内省御伺濟

吳竹寮へ献納

會長澁澤子爵題字

靜寛院奉賛會監修

浄土宗報國會推薦

仰げ女性の龜鑑

家庭教化の紙芝居

すでに好評噴々！

日本女性の 靜寛院宮

御かがみ

七十年令忌記念 紙芝居

決戦下にあつて普ねく軍國女性に「和宮精神」を
顯彰し以て女性の針路を明示せるものである。本紙
芝居發行以來、國民學校、女學校、大日本婦人會を
初め各方面に絶讃を拍しつゝある。令徳普及のため
希望者に實費六圓(送料共)にて頒布す。

部數に限りあり、至急御申込を！

實費六圓(送料共)但し料金先拂ひのこと

發行所

財團
法人

靜寛院宮奉賛會

特別取次所

浄土宗報國會

東京都芝區芝公園十五號浄土宗務所内

振替東京一五一二一番

編輯後記

◇吉田絃二郎先生からいつもなが
ら御激勵の玉稿を頂きました。

◇本號は安倍季雄先生の童話、式
場隆三郎、柳山潤雨先生の隨筆を

頂きました。深謝いたすとともに
今後とも御指導の程願ひます。

◇當會庶務の責任者であつた池田
閑基君はこの程お召しにより勇躍

入團されました。同君入團の日は
奇しくも義兄の陸軍中尉齋藤嶺州

君の入隊の日であり、兄弟揃つて
第一線に活躍されてゐます。

◇本誌は會員各位と手を取り合つ
て精々報國の誠を盡したく努力し

てゐます。何かと御教示願ひま
す。

◇八月號表紙並に巻頭カットは跡
部白鳥氏のものにて、目次に誤植

がありお詫びいたします。

◇部數不足のため前金切れとなつ
た方には發送中止をいたしてゐま

すので、御迷惑ながら早めに會費
を御納入下さい。

浄土 十月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和九年九月三日印刷納本

昭和九年十月一日發行

(定價十二錢)

東京都芝區芝公園十五號明照會館

編輯兼 眞野 正順

發行人 眞野 正順

印刷人 村瀬 秀雄

東京都牛込區市ヶ谷加賀町一ノ三

印刷所 大日本印刷株式會社

配給元

東京都神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館内

振替東京八二一八七番

會員番號二二五七一七八

「浄土」購讀規定

定價 金十二錢

會費 金二圓六十八錢

一ヶ年 (送料共)

振替掛込みは必ず「浄土」の
振替掛込みは必ず「浄土」の